

大正から昭和初期にかけて都市における中産階級の台頭と共に生活様式を改善しようとする試みが博覧会、展覧会、あるいは団体の活動を通じて多数実施される

・博覧会を通じた生活改善の提案

1915 家庭博覧会（大正4年）：台所の改善（入澤常子） 子供部屋 中流住宅（伊東忠太）

1918 生活改善展覧会（大正7年）：文部省が開催

1922 東京平和記念博覧会（大正11年）：居間型の住宅（生活改善同盟会）

・団体による啓蒙活動

1916 住宅改良会（大正5年）：橋口信助（「あめりか屋」開設者）により設立

賛助員：134名（大隈重信等）、顧問14名（武田五一等）

1920 生活改善同盟会（大正9年）：椅子座式、家族本位、衛生・防火、

実用本位の庭園、家具の実用性、共同住宅・田園都市施設の奨励

（内田青蔵『日本の近代住宅』鹿島出版会、2016、p.88）

■ 家庭博覧会（大正4年）

大正4年5月、6月と国民新聞社が創刊25周年を記念して上野公園不忍池畔にて開催した博覧会。

「家庭問題をテーマとした最初の本格的博覧会」
(内田青蔵『あめりか屋商品住宅』住まいの図書出版局、p.85)

■ 博覧会の役員

名誉会長 : 子爵 法学博士 平田東助 **伊東忠太の叔父**
名誉副会長 : 男爵 後藤新平
 : 男爵 法学博士 阪谷芳郎
名誉顧問 : 平山成信
 : 男爵 武井守正

(内田青蔵『あめりか屋商品住宅』住まいの図書出版局、1987、p.86)

■ 家庭博覧会（大正4年）に合わせた出版物『理想の家庭』の目次

理想の家庭目次	
理想の家庭	国民新聞社長 徳富猪一郎氏
教育	実践女学校長 下田歌子女史
学校の修業年限と學費	三五
結婚	鳩山春子女史
婚禮の儀式	三七
育兒	東京小児病院院長 瀨川昌香氏
育兒の楽	五八
衛生	東京女醫學校校長 吉岡彌生女史
衛生の楽	七五
交際	山脇高等女學校校長 山脇房子女史
交際の心得二三	九六
住宅	東京帝國大學工學部教授 伊東忠太氏
中流の納戸と裁縫部屋	一三三
室内の裝飾	婦人の友主筆 羽仁もと子女史
住宅に就ての方位	一三九
室内掃除のこと	日本女子大學教授 井上秀子女史
器具の扱ひ方	一五四
庭園	通信省囑託長 岡安平氏
庭園に就ての注意二三	一六二
園藝	東京府立園藝學校長 鈴木武太郎氏
植木鉢の土に就て	一九一
園藝十二ヶ月	二〇二
臺所	入澤醫學博士夫人 入澤常子女史
臺所用器具の扱ひ方	二〇三
家庭料理	赤堀製茶教場主 赤堀峯吉氏
料理のこといろいろ	二二四
家庭經濟	日本女子商業學校監 嘉悦孝子女史
衣服	私立和洋裁縫女學校長 堀越千代子女史
衣服に就て	二六八
洗濯	東京女子高等師範學校教授 宮川壽美子女史
洗濯法いろいろ	二七九
汚點抜き法いろいろ	二九三
下婢の使ひ方	加藤醫學博士夫人 加藤常子女史
	三〇二

講演者による追記

出典：「理想の家庭」

者述講及者筆執書本

左中右
入鈴長
澤木岡
常武安
子木平
女耶氏



左中右
宮彌赤
川越彌
壽千
美代峰
子女吉
女史氏



左中右
巖加嘉
谷藤悦
小常孝
波子女
女史氏



者述講及者筆執書本

左中右
嶋下德
山田富
春歌猪
子女一
女女耶
史史氏



左中右
山吉瀬
脇岡川
房淵昌
子女生
女女普
史史氏



左中右
井羽伊
上仁東
秀もと
子女忠
女史太
史氏氏



「理想の家庭」

□ 講演者による追記

■ 「一畳半」の台所と入澤常子の主張



「一畳半の台所」

(出典：「理想の家庭」 『近代日本生活文化基本文献集-ひと・もの・すまい-』 第I期 明治・大正編 第7巻、p.267)

- ・ 「我々の住宅で最も大切なのは、子供の部屋と台所ではないかと思えます。」
- ・ 台所の面積
日本の中流住宅における台所（4畳半、6畳）
→もっと狭くてよい。
- ・ 台所の設計
「台所は一家の経済及び衛生において最も重大な関係」を持っているが「改良」がない
- ・ 器物の経済
台所の用具に工夫が必要。
米櫃、布巾掛け、雑巾掛け等
- ・ 台所用器具の扱い方

■ 平和記念東京博覧会（大正11年 1922）

大正11年3月から7月末まで東京府が主催で上野公園にて開催した博覧会。住宅実物出品である文化村は、当博覧会開催時、建築学会が住宅の改善を解決する最大急務であるとし、委員長に田辺淳吉、幹事に久野節を挙げて「二重生活」(*)を解消するために実施された。

（大熊喜邦「文化村となるまで」

高橋由太郎『文化村の簡易住宅』洪洋社、（p.13））

*「二重生活」とは和風と洋風の様式が混在した生活のこと。洋服で仕事をして帰宅後和服に着替えるような生活習慣が分かりやすい事例。衣服だけでなく、畳を敷いて床に直接座る和風の様式と、床を張って椅子に腰かける洋風のものが混在している状態も二重生活に含まれる。

■ 出品者

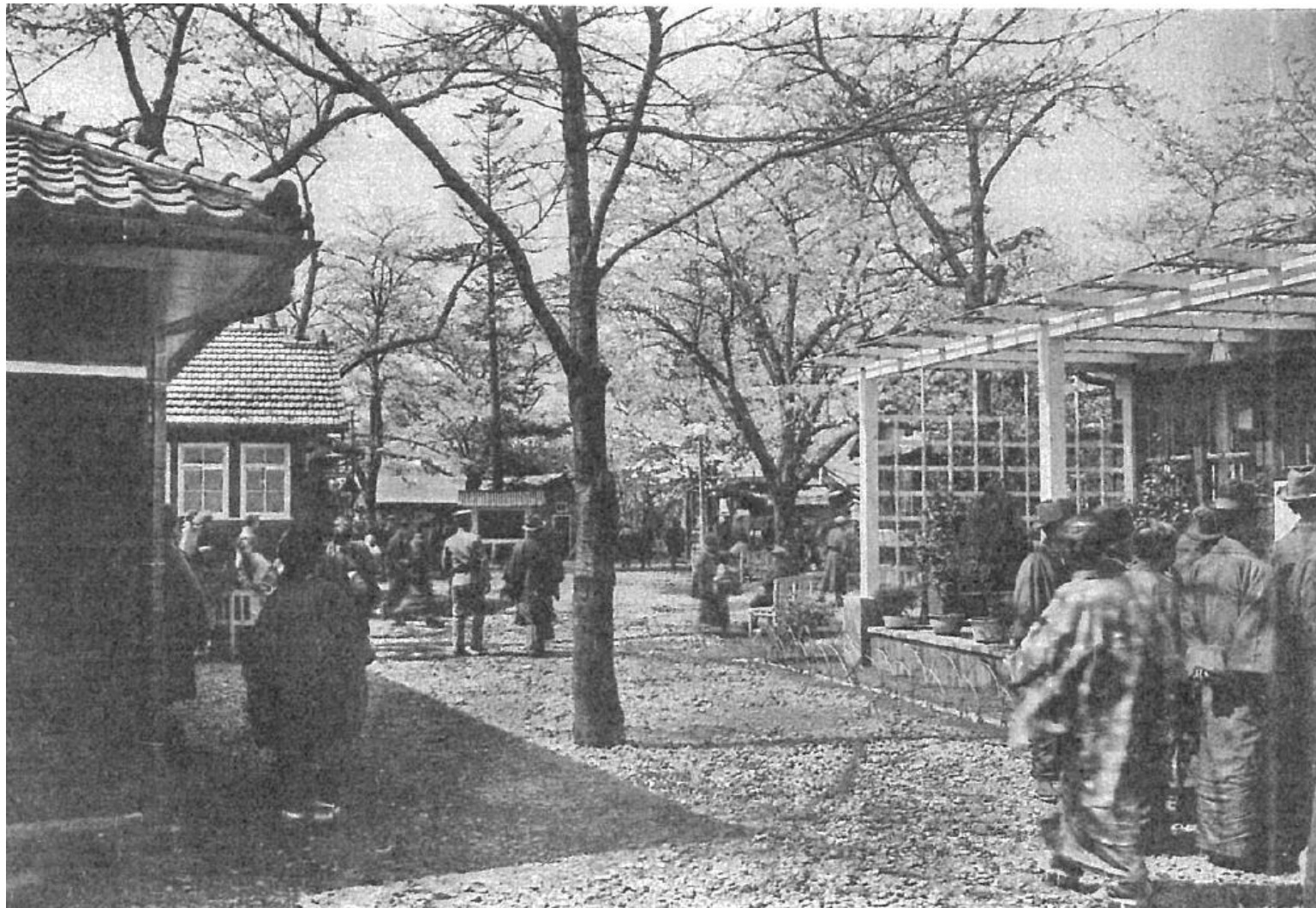
- ・ 生々園宏達彌
- ・ 吉永京蔵
- ・ 日本セメント株式会社
- ・ 建築興業株式会社
- ・ 島田藤吉
- ・ あめりか屋
- ・ 小澤慎太郎
- ・ 飯田徳三郎
- ・ 合資会社銭高組
- ・ 前田錦蔵
- ・ 上遠喜三郎
- ・ 東京材木問屋同業組合
- ・ 生活改善同盟会
- ・ 樋口久五郎
- ・ 木村清兵衛

■ 東京平和記念博覧会（大正11年）



（出典：「文化村の簡易住宅」 『近代日本生活文化基本文献集-ひと・もの・すまい-』 第Ⅱ期 大正・昭和編 第11巻、p.30）

■ 東京平和記念博覧会（大正11年）

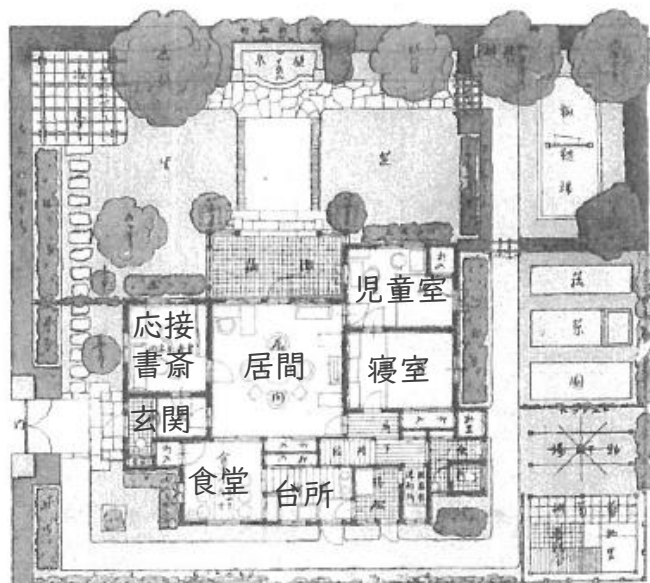


（出典：「文化村の簡易住宅」 『近代日本生活文化基本文献集-ひと・もの・すまい-』 第Ⅱ期 大正・昭和編 第11巻、p.31）

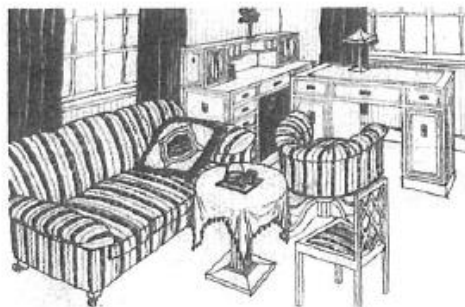
■ 東京平和記念博覧会（大正11年）における生活改善同盟会出品住宅

特徴

- ・ 内部は洋式、外部は「日本趣味」
- ・ 間取は「家族本位」で居間を中心に諸室を配置
- ・ 児童室、寝室は「洋間」
- ・ 「現時の文化生活に順応した小住宅」



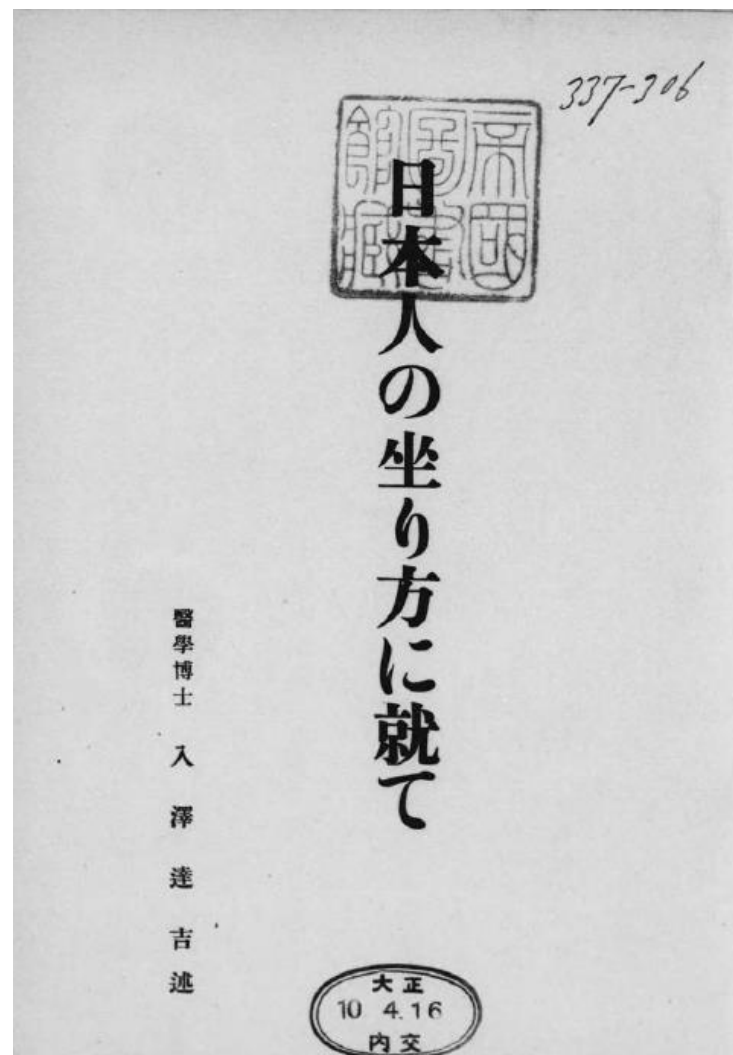
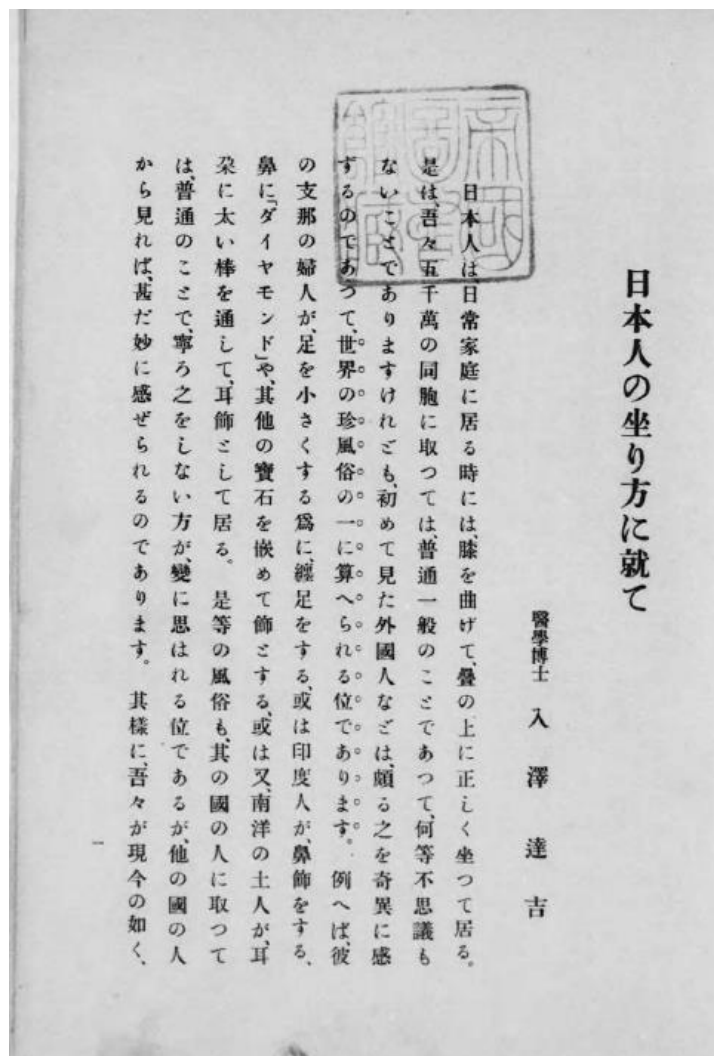
生活改善同盟会出品住宅 庭園配置図



二重生活を純化する改善住宅

高橋由太郎『文化村の簡易住宅』洪洋社、大正11年（1922）
（『近代日本文化生活基本文献集』第Ⅱ期 大正・昭和初期 第11巻、p109）

■ 入澤達吉のユニークな研究



入澤達吉『日本人の坐り方に就て』克誠堂書店、大正10年

(初出：大正8年10月 第41回学術講演会における講演)

■ 入澤達吉のユニークな研究と家屋の関わり

如何にして日本人の體格を改善すべきか 目次

發行者の言葉……………一

一、日本國民に缺乏する保健思想……………九

二、如何にして日本人の體格を改善すべきか……………七

(一) 日本人歐羅巴人に及ばず……………七

(二) 足の短い日本人……………六

(三) 離婚の價值如何……………二

(四) 衣服の改良……………三

(五) 脂肪分が足らぬ……………三

(六) 屈んで歩く日本の家……………四

(七) 學校以外の體育を獎勵せよ……………三

目次……………三

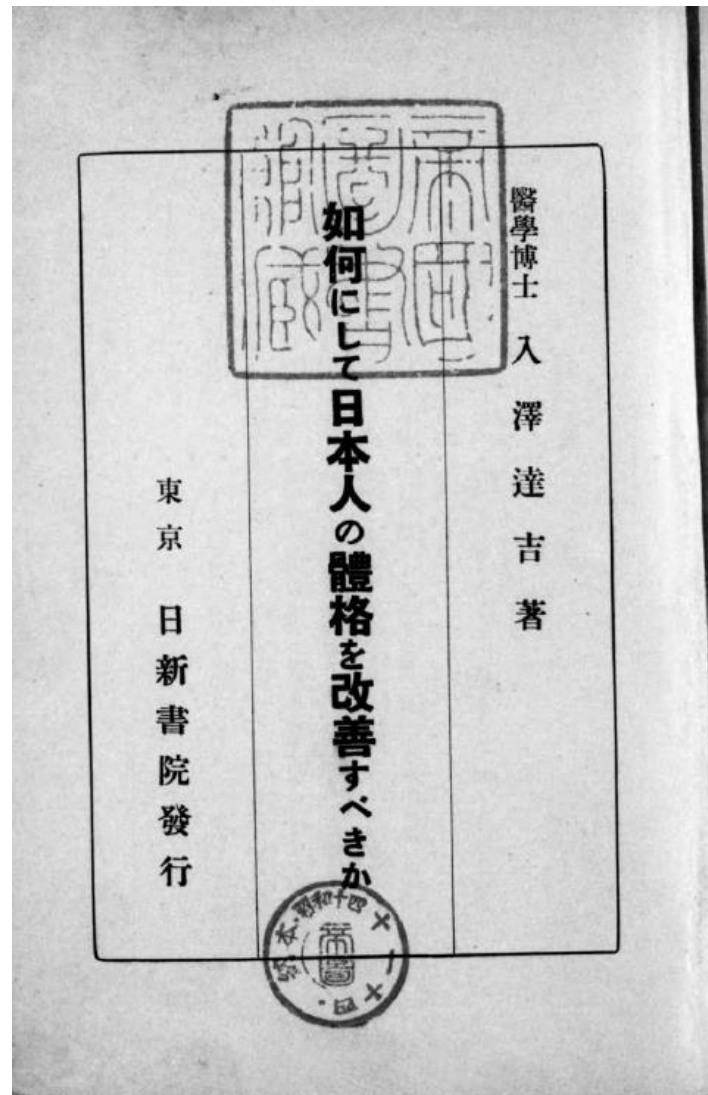
目次……………四

(八) 瑞典の體操學校……………六

(九) 人口増殖に熱中する歐米人……………九

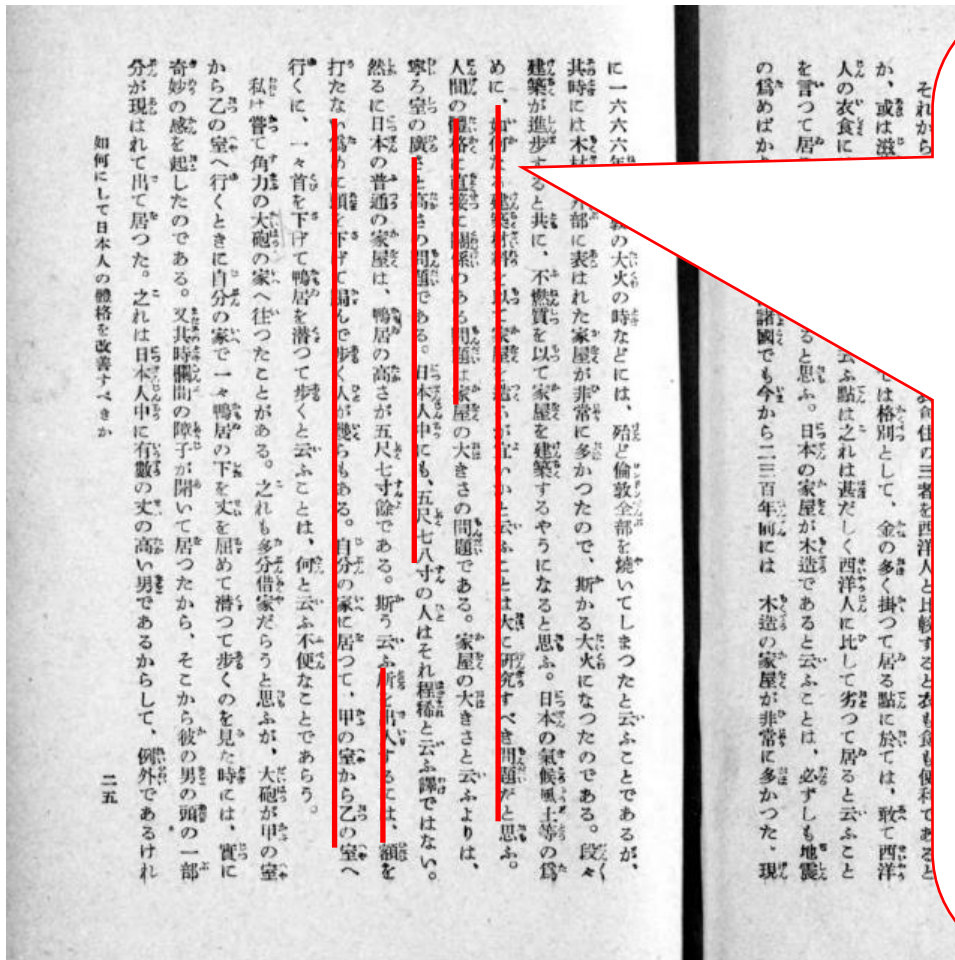
(十) 牛乳 燻 問題……………〇

(十一) 日本人の不養生……………二



入澤達吉『如何にして日本人の體格を改善すべきか』日新書院、昭和14年より
(初出：大正2年10月「新日本」第3卷第10号所載)

■ 入澤達吉のユニークな研究と家屋の関わり

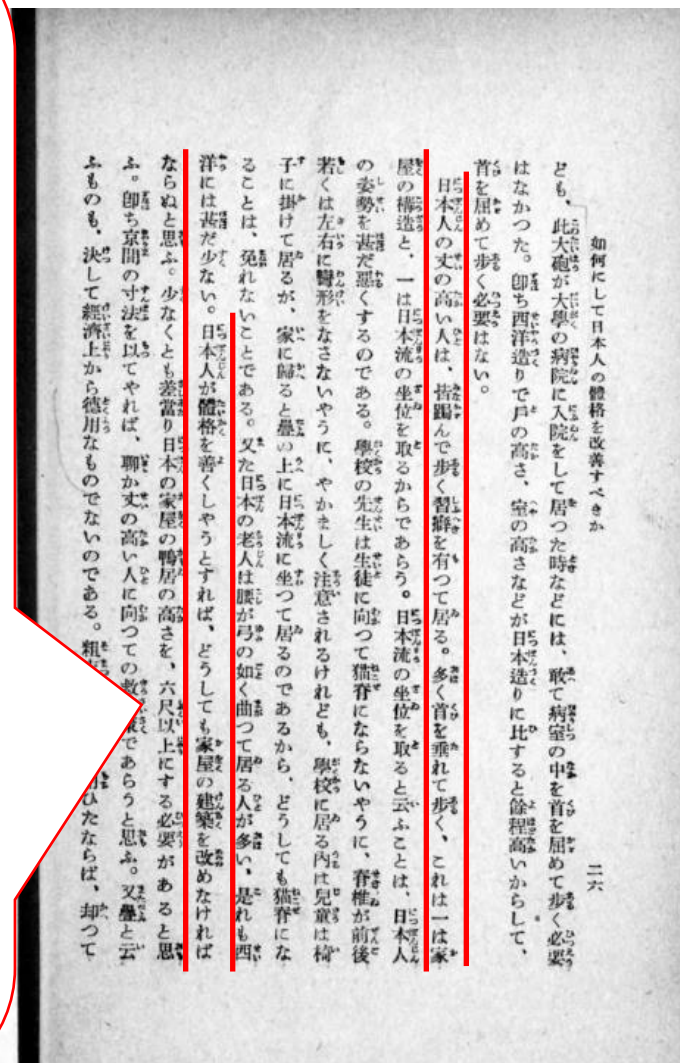


(前略) 人間の体格に直接関係のある問題は家屋の大きさの問題である。家屋の大きさというよりはむしろ室の広さと高さの問題である。(中略) 日本の普通の家屋は、鴨居の高さが5尺7寸余りである。(中略) 甲の室から乙の室へ行くに、一々首を下げて鴨居を潜つて歩くといふことは、何と不便なことであろう。

入澤達吉『如何にして日本人の體格を改善すべきか』日新書院、昭和14年より
(初出：大正2年10月「新日本」第3巻第10号所載)

面白いのは人間の体格と家屋における部屋の広さと高さに言及されていることであり、
具体的な寸法として理想とする鴨居の高さが記載されていること。

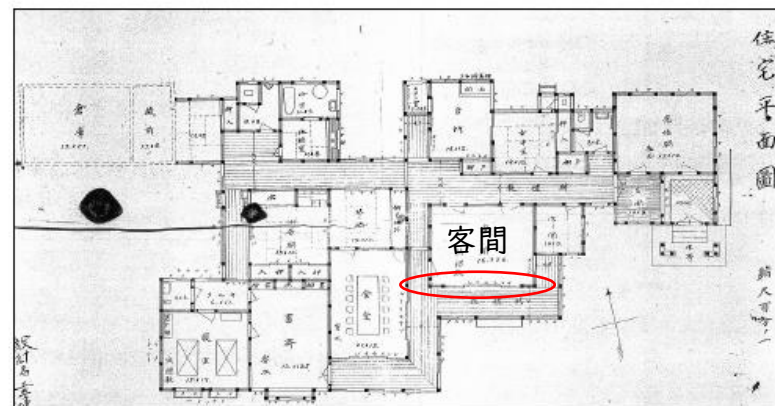
日本人の丈の高いひとは、皆かがんで歩く習癖をもっている。多く首を垂れて歩く、これは一は家屋の構造と、一は日本流の坐位を取るからであろう。日本流の坐位をとるということは、日本人の姿勢を甚だ悪くするのである。(中略)日本人が体格をよくしようとするばどうしても家屋の建築を改めなければならぬと思う。少なくともさしあたり日本の家屋の鴨居の高さを6尺以上にする必要がある。(以下略)



入澤達吉『如何にして日本人の体格を改善すべきか』日新書院、昭和14年より

(初出：大正2年10月「新日本」第3巻第10号所載)

■ 荻外荘の鴨居の高さを確認してみると（客間の建具寸法）、、、



昭和2(1927)年創建時の平面図 伊東忠太のサインがある図面(杉並区蔵)

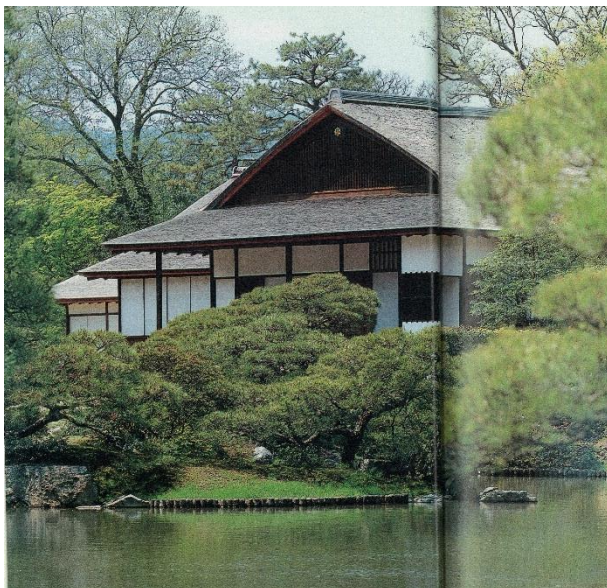
建具高さ(H) = 1909mm

1尺 = 303mm

よって H = 6.3尺となり

6.0尺以上であることが判明

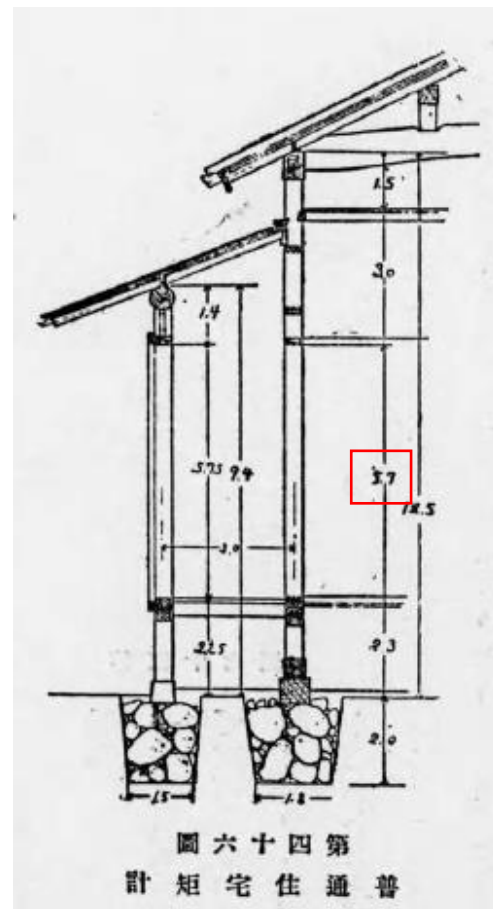
■ 近世における伝統的な鴨居と大正期の鴨居の高さを見てみると、、、



桂離宮 古書院 月見台

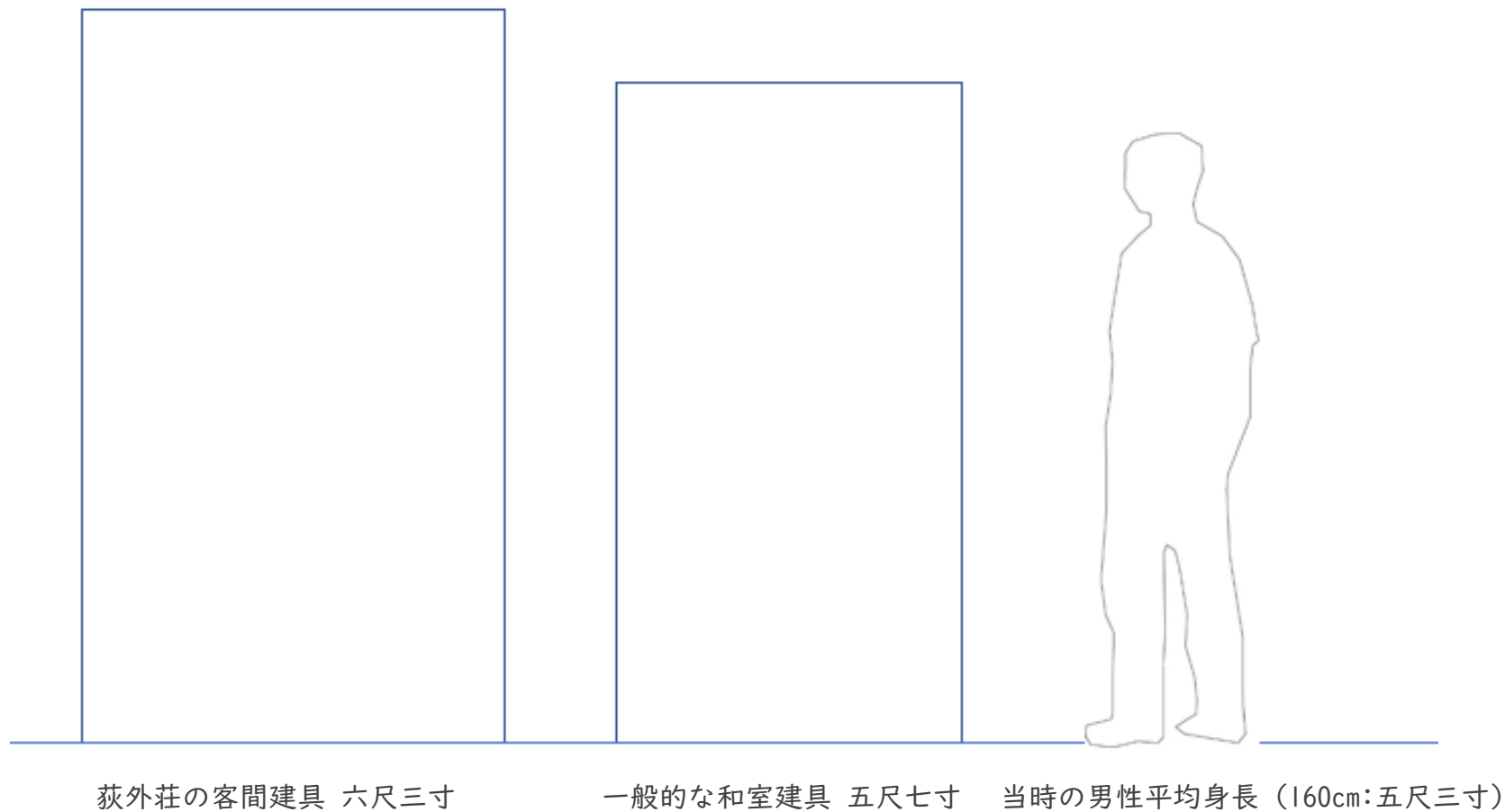
『新建築 臨時増刊 桂離宮』新建築社、1982

p.56にある「普通の日本の家屋の鴨居の高さ」について二つの資料から5.7尺前後であることを確認。



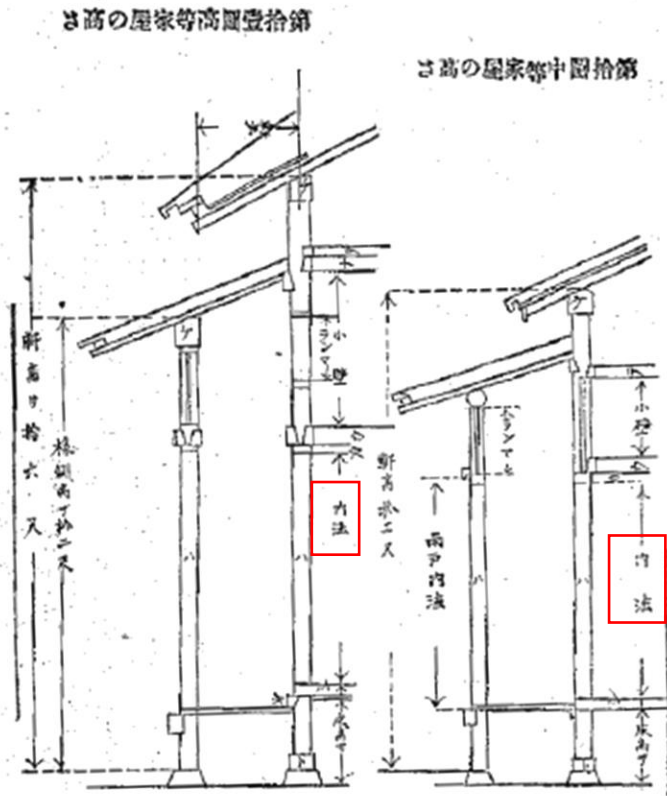
保岡勝也選『理想の住宅』嵩山房、大正15年、p.163

■ 建具の大きさのイメージ



■ 鴨居の高さについて (家屋の高さと格式)

『通俗家屋改良建築法』における「家屋の高さの事」の記載



(35) 事の高の屋家

高さ及小窓の高さ
床の高さは通銀より床の裏の上迄を云ふ普通住居の床高さは一尺五寸より二尺位迄とし或は建物の部位によりは三尺四尺位に及ぶものあり然れども一定の標準とすべきものなく各自の適宜に定むるなり

内法高きとは敷居より鴨居迄の高さを云ふ即ち或は障子の高さなり普通此内法は五尺七寸五尺八寸六尺とす就中五尺七寸は普通一般の家屋に用ふる高さなり障子の出来合品は皆之に準じて製作し其五尺八寸或は六尺等は特に製作せしむるを要す高等の建築に於ける内法高きは六尺或は六尺五寸を用ふる慣例なり

小窓とは鴨居の上より天井以下内法の高さは定まるなり小窓の高さは窓の断板によりて相當の高さならざるべからず若し其高よりしさを得れば其窓は品格に乏しく又特生上室内に對する空氣の好弊を減ずれども是等に於て標準とす

工學士真水英夫校閱 井上繁次郎 著

真水英夫校閱 井上繁次郎著 『通俗家屋改良建築法』東京博文館、明治35年、p. 34、図版p. 38

「高等の建築における内法高きは六尺あるいは六尺五寸を用いる慣例なり。」(右上赤線部)との記載があり、格式と鴨居の高さとの関連性が伺えて面白い。

■ 趣味と建築について（柴田邸の支那館 滋賀県長浜市） 煎茶趣味に伴う中国風の意匠の積極的な導入事例



支那館前室の入口廻り

支那館前室南面/支那館前室の入口廻り
伊藤ていじ/横山正 『現代和風建築集<6>洋風との邂逅』 講談社、1984

■ 趣味と建築について（柴田邸の支那館 滋賀県長浜市）



支那館主室



支那館主室

伊藤ていじ/横山正 『現代和風建築集<6>洋風との邂逅』 講談社、1984